





11月23日（祝）堺伝統産業会館で「第2回都市交通フォーラム@関西」をNPO法人RACDAと共同開催しました。テーマは「関西から発進、三位一体の交通まちづくり！交通ネットワークを守って活かそう」で、70名の参加者がありました。

基調講演は、猫駅長で有名な「和歌山電鉄」の代表取締役専務、磯野省吾様に「和歌山電鉄の活性化と今後の取り組み」について基調講演していただいた後、大阪産業大学教授、波床正敏先生にコーディネーターをお願いし、阪堺線活性化の現状を確認するとともに、今後の課題について関係者でパネルディスカッションによる討議を行いました。

先ず、基調講演ですが、磯野代表取締役専務から廃線の危機にあった南海貴志川線を行政の支援を得ながら再生されてきた経緯をご説明いただきました。現在は乗降客数も回復し、猫駅長効果もあり全国からも注目され、観光客も増えてきていますが、地域やお客さまと一体となって事業再生の取り組みをされてきたことなどをご説明いただきました。

会場からの質疑では、地元関係者からは南海和歌山市駅や加太線への乗り入れの希望などが地元関係者から出されていることや、車両老朽化への懸念、特に部品調達の問題について質疑がありました。

パネルディスカッションでは、RACDA大阪・堺、堺市交通部、堺市商店連合会関係者がパネラーとして登壇し、冒頭、RACDA大阪・堺（野木理事）からは、これまでの活動とこれからの問題についての説明がありました。堺市による阪堺線の支援策は一定の成果をあげていますが、その一方で、住吉・恵美須町間の減便、予定されている浜寺近辺の連続立体化工事による長期運休などが新たな問題として懸念されるとの報告があったほか、商工団体関係者からは、商店街の活性化と阪堺線の再生が両輪である旨の発言がありました。堺市からも今後とも市民、利用者と一緒に阪堺線の活性化に努めていく旨の説明がありました。しかし、堺市の支援策によりV字回復した利用者数も本年は頭打ち状態であることが会場参加の事業者から報告がありました。

一般参加者からは、阪堺線を日本橋筋経由で難波方面まで伸ばす提案や堺市の東西路線を再検討すべきなどの意見が出されました。

交通ネットワークは交通網ばかりでなく利用者、事業者、行政が一体となっこそ、その機能と価値が維持されるものと確信しています。今後、大きな問題となる浜寺近辺の連続立体化工事による長期間の交通ネットワーク切断と言う問題を抱え、阪堺線の存廃問題が再び起しかねない事態を招くのではないかと危惧していますが、この三者が一体となってこの問題解決していくことの必要性を痛感いたしました。

最後に、堺市長が駆け付けられ、堺市内の東西軸の弱さを指摘され、今後、東西軸の在り方を検討していきたいと発言されました。

なお、フォーラム終了後「宣言書」をRACDA大阪・堺、福井理事長より読み上げられました。（別紙参照）